

創世記16章「ご覧になる神」

16:1 アブラムの妻サライは、彼に子どもを産まなかった。彼女にはエジプト人の女奴隷がいて、その名をハガルといった。16:2 サライはアブラムに言った。「ご存じのように、【主】は私が子どもを産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれるでしょう。」アブラムはサライの言うことを聞き入れた。16:3 アブラムの妻サライは、アブラムがカナンの土地に住んでから十年後に、彼女の女奴隷のエジプト人ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として与えた。16:4 彼はハガルのところに入った。そして彼女はみごもった。彼女は自分がみごもったのを知って、自分の女主人を見下げるようになった。16:5 そこでサライはアブラムに言った。「私に対するこの横柄さは、あなたのせいです。私自身が私の女奴隷をあなたのふところに与えたのですが、彼女は自分がみごもっているのを見て、私を見下げるようになりました。【主】が、私とあなたの間をおさばきになりますように。」16:6 アブラムはサライに言った。「ご覧。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。彼女をあなたの好きなようにしなさい。」それで、サライが彼女をいじめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。16:7 【主】の使いは、荒野の泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、16:8 「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と尋ねた。彼女は答えた。「私の女主人サライのところから逃げているところです。」16:9 そこで、【主】の使いは彼女に言った。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」16:10 また、【主】の使いは彼女に言った。「あなたの子孫は、わたしが大いにふやすので、数えきれないほどになる。」16:11 さらに、【主】の使いは彼女に言った。「見よ。あなたはみごもっている。男の子を産もうとしている。その子をイシュマエルと名づけなさい。【主】があなたの苦しみを聞き入れられたから。16:12 彼は野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼はすべての兄弟に敵対して住もう。」16:13 そこで、彼女は自分に語りかけられた【主】の名を「あなたはエル・ロイ」と呼んだ。それは、「ご覧になる方のうしろを私が見て、なおもここにいるとは」と彼女が言ったからである。16:14 それゆえ、その井戸は、ベエル・ラハイ・ロイと呼ばれた。それは、カデシュとベレデの間にある。16:15 ハガルは、アブラムに男の子を産んだ。アブラムは、ハガルが産んだその男の子をイシュマエルと名づけた。16:16 ハガルがアブラムにイシュマエルを産んだとき、アブラムは八十六歳であった。

導入

これまでの創世記におけるアブラムの話はこうでした。

創世記12章で、アブラムは、故郷を離れ、神が示される場所へと信仰によって旅立つよう神に召されました。後に、その地がカナンの地であることが示されました。

神は、アブラムの子孫を偉大なる国民にすると約束されました。また、アブラムを守るとも約束なさいました。その方法とは、アブラムを祝福する人々を祝福し、彼に敵対する人々を呪うというものでした。

そして、アブラムをとおして地上のすべての民族を祝福するとも約束されました。

神の約束を得たアブラムでしたが、ふたつ問題がありました。

まず、妻のサライは不妊で子を産めませんでした。次に、神が約束された土地であるカナンに到着すると、そこにはすでにたくさんの人が住んでいて、アブラムがそこを占領できるようにと出ていってくれるわけはありませんでした。

それでもアブラムは神を礼拝し、神の導きに忠実に従いました。

しばらくして、その地に飢きんが起ったので、アブラムは妻と家族を連れ、食物を求めてエジプトに行きました。彼はそのエジプトで、ひとつめの過ちを犯しました。エジプト人に妻のことで嘘をついたのです。妻を妹だと偽りました。本当のことを知られたらどうなるかを恐れたからです。アブラムは、きっと妻はパロの宮廷に連れていかれて自分は殺されるだろうと思いました。アブラムのひとつめの過ちは、守ってくださるといふ神の約束を完全に信じきれなかったことです。

それでも、神はご自身の約束を守られました。パロの宮廷にひどい災害をもたらされたのです。その後、サライが実はアブラムの妹ではなく妻だということが知れました。

アブラムは、妻や家族とともにエジプトから追い出されました。

彼は自分の罪を悔い改めて、神との正しい関係に立ち戻りました。

アブラムがカナンに戻った時、アブラムの家族や牧者と甥のロトの家族や牧者との間に問題が起きました。それで、争いを避けるために、離れて住むことにしました。アブラムは謙虚にも、どこに住むかを選ぶ選択権をロトに譲りました。ロトは、ソドムの町に近いヨルダンの低地を選びました。

人間的な視点では、これは正しい選択に見えました。しかし、この選択が後に紛争に巻き込まれる原因となってしまいました。彼と家族は捕虜として捕らえられたのです。

しかし、アブラムが318人のしもべを連れて夜中に敵陣に奇襲をしかけ、ロトと家族を助け出し、財産もすべて取り戻しました。

救出作戦が成功すると、ソドムの王がアブラムに金銭や品物を差し出してアブラムを手なづけようしました。アブラムは、ソドムの王の申し出を拒みました。そして、シャレム（エルサレム）の王メルキゼデクに十分の一を与えて忠誠を誓いました。

メルキゼデクはキリストの予型です。彼は、アブラムと同じ神、つまり、天地をお造りになったいと高き神を礼拝していました。

次に、神は創世記12章でアブラムに約束なされたことを追認するために、アブラムと契約を交わされました。

先週の箇所の中に、創世記15：6で、アブラムは神の約束を信じたので、それが彼の義と認められたとありました。

神は、ご自身の義をアブラムの霊の口座に入れてくださったのです。

この契約が当時の通常の契約と比較して違う非常に重要なポイントを私たちは学びました。その重要なポイントとは、当時の通常の契約では、当事者双方が割いた動物の間を歩くことです。

しかし、この場合、神はアブラムを深い眠りにつかされたので、神だけが煙の立つかまどと燃えているたいまつというかたちで動物の間を進まれました。つまり、神だけにこの契約を守る責任があることを意味しました。

アブラムがしなければならないのは、神を信じつづけることだけです。契約の約束を成就するのは神の役目でした。

神は、アブラムに地理について教え、将来彼が獲得すべき土地の範囲を示されました。それは、エジプトにあるつまりナイル川からユーフラテス川まででした。

これでアブラムも安心して神が約束を実現なさるのを待てるだろうと思うでしょう。

しかし、実際はそうなりませんでした。時が経ち、ふたたび誘惑と不安が彼を襲います。

では、16章に進みましょう。

この16章で、3つのことに注目したいと思います。

1. アブラムは、間違っただけに耳を傾けた。(1-2節)
2. アブラムは、不従順の結果に苦しんだ。(3-6節)
3. 神は、困った状況に恵みを注がれた。(7-16節)

1. アブラムは、間違っただけに耳を傾けた。(1-2節)

神がアブラムに子を与えると最初に約束なさってから、10年ほど経っていました。3節から、12章と16章の間には約10年の隔りがあることがわかります。

サライは不妊であり、子を産める年齢は過ぎていました。彼女は10年間、神が奇跡を起こして子を産ませてくださるのを待ちましたが、それは実現していませんでした。

それでサライは、神の奇跡を待つのをやめて、自分でどうにかしようとしました。

サライは、神のご計画に人間の知恵を持ちこみました。もうそれ以上神を待てなかったのです。

彼女の過ちは、神が奇跡を起こしてご自身の約束を成就することができるお方である、そして、アブラムとサライの子を与えることのできるお方である、と信じられなかったことです。

サライが本当に神の約束を信じていたなら、神ご自身のタイミングでその奇跡を起こしてくださるのを待てたはずですが。

しかし、神が奇跡を起こしてくださるのを待つよりもっと良い方法があると彼女は思いました。夫のアブラムに女奴隷を与えて、その女奴隷をとおして子を授かるという方法です。この時のサライには、これが名案のように思えました。

残念なことに、アブラムはサライの言葉を聞き入れてしまいました(2節)。

創世記3章でエバはサタンの声に耳を貸してしまい、神が食べてはいけないとおっしゃった木の実を食べるようそそのかされました。

今回も同じです。サライはサタンの声に耳を貸し、アブラムは妻のサライの言うことを聞き入れてしまいました。

ここで、私たちに当てはめて考えてみましょう。

すべてのクリスチャンが人生で直面する最大の問題は、「間違っただけに耳を貸す」ことです。

クリスチャンにとっての最大の戦いは、思考の中の戦いです。

サタンが私たちの思考を感化できたら、選択や決断、そして行動も操れるようになるでしょう。私たちが生きる現代社会は、神の知恵やみことばである聖書から隔離した世の中です。信仰を持つクリスチャンでさえ、つらい状況で神を信じて奇跡を待つことをしない場合が多いのです。

神がともにいてくださり、きっとまもなく何らかの形で働いてくださると思える兆候がまったくない状態で、神を信じとおすのはたいへんです。

私は32年前、あるバプテスト教会の牧師に相談をしました。家売って、スコットランドのエジンバラにある聖書学校に行くよう、神に召されていると感じていることを話しました。牧師は私の話を聞いて、どうやって学費を払って家族を養うつもりかと尋ねました。

私は、「家も何もかも売ります。それでもお金がなくなったら、神が必要を満たしてくださいと信じることにします。神に仕えるようにと神が私を召しておられるのですから。」と答えました。

残念ながら、牧師はこう言いました。「信じて、神は奇跡を起こされません。」

牧師は続けて、信仰によって生きてけれども生活できなくなって自分が金銭の援助をしなければならなかった人のケースをいくつか例に挙げられました。今の時代に神が奇跡をとおして必要を満たされると信じるのは無理だと私を説得しようとしたのです。

幸い、私はこの人のアドバイスに耳を貸さず、聖書をとおして語られる神の御声を信頼しつづけました。

ピリピ4：19のみことばは、私の心にも頭にも深く刻まれています。

ピリピ 4:19 また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。

この約束は、忠実に献金していた教会に与えられました。

私も十分の一の捧げ物や献金を忠実に神の働きにささげれば、神が必要を満たしてくださいと確信していました。

それで、この32年間、私は神が奇跡的に私たち家族の必要を満たしてくださいと体験しました。ときには、ぎりぎりのところまで神が与えてくださるのを待たなければならず、それは簡単なことではありませんでした。また、基本的なニーズでなければ、我慢しなければならないこともありました。

皆さんにお勧めします。常に神の御声に耳を傾けてください。神は、ご自身のみことばである聖書をとおして語られます。この世にはいろいろな声があふれていて、その語る内容もさまざまです。しかし、神はただ唯一おひとりです。そして唯一の神は、ご自身のみことばをとおして語られます。

サムエル第二24：10-14に登場するダビデの話を読んでみましょう。

24:10 ダビデは、民を数えて後、良心のとがめを感じた。そこで、ダビデは【主】に言った。「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。【主】よ。今、あなたのもしへの咎を見のがしてください。私はほんとうに愚かなことをしました。」 24:11 朝ダビデが起きると、次のような【主】のことがダビデの先見者である預言者ガドにあった。 24:12 「行って、ダビデに告げよ。『【主】はこう仰せられる。わたしがあなたに負わせる三つのことがある。そのうち一つを選べ。わたしはあなたのためにそれをしよう。』」 24:13 ガドはダビデのもとに行き、彼に告げて言った。「七年間のききんが、あなたの国に来るのがよいか。三か月間、あなたは仇の前を逃げ、仇があなたを追うのがよいか。三日間、あなたの国に疫病があるのがよいか。今、よく考えて、私を遣わされた方に、何と答えたらよいかを決めてください。」 24:14 ダビデはガドに言った。「それは私には非常に辛いことです。【主】の手に陥ることにしましょう。主のあわれみは深いからです。人の手には陥りたくありません。」

自分の罰についても、人の手ではなく、神の手に陥ることをダビデは選びました。

常に神の道を選びましょう。そうすれば、神があなたを顧みてくださいます。

2. アブラムは不従順の結果に苦しんだ。(3-6節)

アブラムは、妻のアドバイスに従い、ハガルという女奴隷と子をもうけました。

サライの提案通りになったのですから、サライはきっと喜んだことでしょう。しかし、女奴隷ハガルは妊娠すると、主人であるサライを見下すようになりました。5節で、こうなったのはアブラムのせいだとサライは言っています。

アブラムは、サライにその責任を転嫁し、自分の奴隷なのだから、好きなようにしなさいと言いました。その結果、サライはハガルにつらく当たったので、ハガルはサライのもとから逃げ出しました。

アブラムが妻の言葉という間違っただけの声に耳を傾けたので、その不従順の結果、苦しむことになりました。

聖書は、私たちが蒔く種は必ず刈り取るとはっきり教えます。

ガラテヤ6：7-10を読みましょう。

6:7 思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。6:8 自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。6:9 善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。6:10 ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょ。

現代の世の中で、自分の過ちの責任をしっかりと取ろうとする人は、あまりいません。他の人のせいにしたり、自分で責任を取らずに誰かになんとかうまくごまかしてもらおうとしたりします。

自分の過ちから学ばない人は、いつまでも同じ過ちを繰り返します。

神はこのことについてはっきりと語っておられます。ですから、私たちはどんな種をまくか、注意しなくてはなりません。

コリント第二9：6-8を読みましょう。

9:6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。9:7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。9:8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。

パウロは、ここでお金について語っています。しかし、OIC にたくさん献金すれば、神がその金額を数えて、それ以上にたくさんのお金を返してくれるという意味ではありません。

ここで語られているのは、どのような姿勢でささげるかが大切だということです。

十分の一やささげものを、惜しみない心でささげるなら、霊的な報いをいただきます。8節は、いつも必要なものは足りるようになる」と語ります。

残念ながら、アブラムは自分にも妻にもハガルにも良くないことをしてしまいました。なぜそうなったのでしょうか。間違っただけの声に聞き従い、誤った選択をしたからです。そうなるのは、当然のなりゆきでした。

人生の大切な決断をする前に十分考えて祈るように、神が私たちを助けてくださいますように。どんな行動や決断にも結果が伴うからです。

蒔いた種は必ず刈り取ることになります。神は侮られるような方ではありません。

3. 神は、困った状況に恵みを注がれた。(7-16節)

サライは間違った選択をしました。アブラムも間違った選択をしました。ハガルの人生は狂わされました。それで彼女は逃げました。その途中、荒野の泉のほとりで休みました。

アブラムが自分の責任を放棄し、サライに任せたので、サライはハガルをいじめました。誰がハガルを助けてくれるのでしょうか。

みことばは、「主の使い」がハガルの置かれた状況を心にかけてくれたと語ります。

ここでまず、「主の使いとは誰か」という問いを考えてみましょう。

多くの学者は、旧約聖書に登場する「主の使い」は、イエス・キリストの現れを象徴すると考えています。

この箇所の内容と「主の使い」による決断の内容から、これは旧約聖書におけるイエス・キリストの現れであると考えられます。これを神学では「神の顕現」と呼びます。

まず、イエスはハガルにサライのところに帰って、サライに従うようにとおっしゃいます。そして、子の将来について、また子孫が大いに増えることについて説明しようとなさいます。

残念ながら、イシュマエルと名付けられるハガルの息子は、野蛮な人になります。

(歴史を見れば、この子からアラブ系民族がうまれたことがわかります。)

それでも、ハガルは誰かが自分のことを気にかけてくれたことに励まされました。そして、その誰かがイエスだとわかり、「あなたは私を顧みられる神だ」と言いました。

神はハガルが困っているのを見て、彼女の心に真理のことばを語られました。ハガルは自分をいじめるサライのところに戻りたくはなかったでしょう。しかし、それは神からの助言ですから、従わなければなりませんでした。

適用

神の恵みが注がれても、必ずしも問題が即解決するとは限りません。しかし、自分がしなくてはならないことが何かわかります。また、神がすべきことを教えてくださることもわかります。困難な状況を脱出する道は、人間的な解決法を求めず、神の指示に従うことです。

ある若者が、牧師に悩みを打ち明けました。彼は、大きな借金があったのです。牧師は言いました。「あなたは、教会に収入の一分をささげていますか。」彼は答えました。「そんなことはできません。」「それが問題なのです。借金を抜け出す方法は、神のみことばに従い始めることです。あなたの場合、持っている以上のお金を使うという浪費癖が問題ですから、十分の一をささげることをはじめなさい。」

若者はしぶしぶ、牧師のアドバイスに従いました。すると、まもなく借金から抜け出しました。それは、お金の使い方など、自分の生き方や決断に神のみことばを取り入れていないことに気づいたからです。

神の恵みが困った状況に注がれると、問題を持った人が聖書に従い始めます。すると、物事がプラスに転じていきます。

私たちが困ったら、神の恵みと助言に応えることができるよう、神が助けてくださいますように。